

## 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討<sup>1), 2), 3)</sup>

毛 新 華<sup>4)</sup> 大 坊 郁 夫<sup>5)</sup>  
大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科

本研究の目的は文化的要因を考慮する社会的スキル・トレーニング (SST) のプログラムの開発とともに、プログラムの効果を SST の実践を通して検討することである。中国の若者の社会的スキルレベルが低下する社会的背景を踏まえ、研究1では、中国文化の要素が考慮された SST プログラムを作成した。研究2では、実験計画法を用いて中国人大学生を統制群 (58名) と実験群 (40名) に配置し、研究1で作成したプログラムを実験群に実施した。その結果、実験群は中国文化に基づく社会的スキル尺度と通文化的社会的スキル尺度の両方で得点が有意に上昇したのに対し、日本文化に基づく社会的スキル尺度の得点は変化しなかった。また、その効果は3カ月の追跡調査においても持続された。一方、統制群はすべての社会的スキル尺度において有意な得点の変化がみられなかった。これらの結果を踏まえ、本研究で開発した SST プログラムの中国文化に特有な要素が検証できたと推論される。

キーワード：プログラム開発、社会的スキル・トレーニング、効果、文化、中国

### 問 題

最近の中国社会では、若者の対人関係能力が低

下していることが指摘されている (毛・大坊, 2006)。対人関係能力低下をもたらす理由として、「一人っ子政策の継続」と「経済の成長」が挙げられる。30年前から始まる一人っ子政策および核家族の増加により、家族内の人間関係の数が減少し、若者たちに幼少時代からの人間関係の経験不足がもたらされた (Liu, 1988)。一方、経済の成長は教育の過熱を促進し、「勉強さえできればよく、他人への思いやりが欠け、優しく豊かな心を持たない子が多くなった」(周, 2006) 状況を作り出した。このような中国独自の社会事情に加え、他の国と同様に、IT製品の普及により、若者の間で電子媒体を介する間接的なコミュニケーションの増加 (大坊, 2003)、バーチャル世界に没頭し、現実の人間関係を軽視する若者の増加 (Peng & Dong, 2010)、などの状況もあり、若者の対人関係能力の低下に拍車をかけた。

このような問題に対して、対人関係能力の改善

- 1) 本論文は第一著者が大阪大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文 (2007年度) の一部を加筆修正したものである。また、本論文の一部は The 7th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology (2007年)、日本心理学会第71回大会 (2007年)、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会 (2009年) において報告された。
- 2) 本研究の実験の実施に多大なご協力をくださった胡金生先生 (中国・遼寧師範大学) に謝意を申し上げます。そして、大変お忙しい中、本稿に貴重なコメントをくださった木村昌紀先生 (神戸女学院大学)、清水裕士先生 (広島大学)、五十嵐祐先生 (北海学園大学)、王飛雪先生 (中国・中山大學) に厚く御礼申し上げます。
- 3) 本論文の査読プロセスにおいて、貴重な意見をくださった審査者の先生方に、心より感謝いたします。
- 4) 現所属：神戸学院大学人文学部
- 5) 現所属：東京未来大学

と向上には、「社会的スキル (social skills)」という概念が有効である。これまでに、社会的スキルと対人関係能力との関連を検討した研究 (e.g., 菊池, 1988; 堀毛, 1994) や、トレーニングを通して社会的スキルが向上され、対人関係能力が改善される報告 (e.g., 後藤・大坊, 2009) が多くあった。そこで本研究の目的は、中国の文化的特徴を踏まえ、中国の若者の社会的スキルを向上させるトレーニングのプログラムを開発し、トレーニングの効果を検討することである。

### 社会的スキルの定義と特徴

相川 (1996) は、社会的スキルを「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発見を可能にする認知過程」と定義している。個人の社会的スキルの向上は、社会生活への適応 (大坊, 2003) や人間関係のストレスの緩和 (田中, 2003)、生活の質 (quality of life) の向上 (皿田, 2003) などに重要な役割を果たしている。その一方で、社会的スキルの不足は孤独感や抑うつ、うつ病などの精神疾患を引き起こす可能性もある (相川, 1992; 相川・藤田・田中, 2007)。

Argyle (1967) は、運動スキル・モデルを踏まえ、社会的スキルを練習により向上可能なものであるとし、社会的スキル・トレーニング (social skills training, 以下 SST と表記する) を提案した。また、Argyle (1967) は、社会的スキルをコミュニケーションプロセスの中でとらえ、SST は実際の行動だけではなく、行動に移るまでの認知的な要素も考慮されるべきであるとしている。この考えに基づき、相川 (2009) は、対人関係における認知と行動を網羅した「社会的スキルの生起過程モデル」を提案した。

社会的スキルを向上させる方法として、アクションリサーチの発想を背景とするラボラトリー・メソッド (Laboratory Method) による体験学習 (Experiential Learning) がある。この方

法は、①具体的体験 (concrete experience)、②体験の反省と観察 (reflections & observations)、③抽象化、概念化、一般化 (abstract, concepts, and generalizations)、④仮説を立てる (hypothesis) という循環的なプロセス (Kolb, Rubin, & McIntyre, 1971) によって構成される。トレーニングの参加者は構造化されたプログラムに参加し、そこで経験したことに対する自分自身による振り返りを通して、自分の行動に目を向ける。また、他のメンバーによる自分へのフィードバックを通して自分自身の行動上の問題を発見し、次の実践で改善することによって、社会的スキルを向上させる (津村・星野, 1996)。このような方法を身につけることにより、参加者が自身に対する自主的な修正が可能となり、トレーニングの場を離れても学んだことを活かし、トレーニングの効果が持続できると考えられる。

### 社会的スキルと文化

社会的スキルの内容は文化と深く関わっている。大坊 (2006) は、社会的スキルを階層性 (「基礎スキル」、「特定スキル」、「目的的技能」) があるものとしてとらえ、文化規範はそれぞれの階層に影響を与えると述べた。その上で、文化において推奨されない行動パターンの表出を避けた方が他者との調和的な関係を築きやすいと主張し、社会的スキルが文化によって規定されると強調している。さらに、堀毛 (1994) や Takai & Ota (1994) は、Berry (1969, 1989) の提唱する etic-emic アプローチ (人間の行動や社会現象などを文化普遍性の観点と文化独自性の観点に分けて理解するアプローチ) を取り入れて、社会的スキルを、どの文化にも共通的な部分とある文化に特有な部分に分けて考える必要があると指摘している。Takai & Ota (1994) は「腹芸」や「以心伝心」などの日本文化の特徴に基づき、日本人の社会的スキルを5つの次元、すなわち、「察し能力 (perceptive ability)」、「自己抑制 (self-restraint)」、「上下関係の調整 (hierarchical relationship management)」

「対人感受性 (interpersonal sensitivity)」, 「あいまいに対する耐性 (tolerance for ambiguity)」に整理した。

一方、本研究で焦点となる中国には、他文化で考えられた社会的スキルの概念や尺度の紹介や適用などの研究 (Cao, Huang, Cheng, & Jiang, 2009; Yu, 1994 など) があるが、これらの研究では社会的スキルを通文化的にとらえており、中国文化の独自性が配慮された研究が少ない (Zhuang, Gan, & Liu, 2004)。こういった現状の中で、Mao & Daibo (2006) や毛・大坊 (2005a, 2005b, 2006) は、「和」や「仁」などの考え方のもとに、中国人大学生の社会的スキルを「相手の面子 (partner's mianzi)」, 「社交性 (sociability)」, 「友達への奉仕 (altruistic behavior)」, 「功利主義 (connection orientation)」という4つの因子にまとめ、中国人大学生社会的スキル尺度 (Chinese University-students Social Skills Inventory: ChUSSI) を作成した。「相手の面子」因子は「相手のことを尊重するように気をつけている」, 「相手の面子をつぶさない」などの項目によって構成され、対人関係において、相手の面子を重んじる傾向を反映している。「社交性」因子は「人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる」, 「人見知りをせず、どこまでもとびこんでいける」などの項目によって構成され、個人が積極的に他者とコミュニケーションを行う傾向を反映している。「友達への奉仕」因子は「友達と一体感をもってつき合う」, 「友達が困っている時、力を貸してあげる」などの項目によって構成され、対人関係において他者を助ける行動傾向を反映している。「功利主義」因子は「普段、私はできるだけたくさんのコネを作るように心がけている」, 「私は人脈を重視する方である」などの項目によって構成され、対人関係において極力自分のネットワークを拡張しようとする行動を反映している。

Hwang (1987, 1997, 2006) や園田 (2001) は

資源所有者と要請者の間のやりとりを例に、中国人同士の間の特有な対人的相互作用の心理的メカニズムを分析し、guanxi-mianzi model を提唱した。このモデルによると、資源の要請者は所有者の面子をたてることにより、所有者とつながりを持ち、所有者から助けをもらう。このようなプロセスを構成する「面子をたてる (mianzi 志向)」, 「わたりをつける (guanxi 志向)」, そして「助け (renqing 志向)」という要素は上記の毛らの研究で得られた「相手の面子」因子, 「功利主義」因子, そして「友達への奉仕」因子を裏付け、中国文化に特有な社会的スキル特性であると考えられる。一方、「社交性」因子は Buhrmester, Furman, Wittenberg, & Reis (1988) がまとめた欧米の社会的スキル尺度や今野・堀 (1993) がまとめた日本の社会的スキル尺度の内容と多く重なっているため、通文化的な内容と考えられる。

#### 従来のSSTの問題点と本研究の目的

「社会的スキルがSSTに基づいて向上される」特徴を踏まえ、津村 (2002) は、社会的スキルの生起モデルとラボラトリー・メソッドによる体験学習は相補的なモデルとして、社会的スキルの獲得に役に立つと述べている。また、大坊 (2003)、後藤・大坊 (2005) では、参加者の基本的な社会的スキルの再確認を促すことを目的に、人間関係そのものの構築に必要な認知的・行動的な要素からなるコミュニケーション分析に基づくプログラムと体験学習に基づくプログラムを併用して、プログラムを編成した。これまでに多くのSST実践 (大坊・栗林・中野, 2000; 後藤・大坊, 2005, 2009) が展開され、参加者の自己報告尺度による社会的スキルの向上について検討されている。本研究では、SSTの目的が参加者の行動変容であることを踏まえ、行動変容の前提となる意識の変容を検討する上記の先行研究にならい、参加者の意識レベルでの社会的スキルの変化について検討する。

しかし、従来のSST実践の効果検証について

は、測定法や実験計画法の不徹底という欠点がある。例えば、検証されるデータには、SSTの参加者しか存在しておらず、実験計画法における実験群しか設定されていない。また、SSTを受ける前の社会的スキルの個人差はSSTの効果を左右する可能性があるにもかかわらず、実験群のサンプルのSSTを受ける前のスキルの程度を考慮せずにSSTの効果が検証にされている。ほかにも、SSTの効果がトレーニング終了直後に限られ、長期的な効果検証が行われていないなどの問題点が挙げられる。

さらに、従来のSSTは文化への配慮が不十分で、とりわけ文化に特有な要素を考慮したSSTが行われていなかった。社会的スキルと文化は密に関連するため、文化によって規定される社会的スキルの内容を吟味しなければ、SSTが不完全なものになることが懸念される。そのため、SSTのプログラムは文化に関連したものにすべきである。また、文化が社会的スキルの内容を規定するという観点を踏まえ、SSTの効果検証の際には、欧米の尺度を用いるのではなく、SSTでトレーニング対象となる文化に相応しい尺度を使用すべきであると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では、実験計画法に基づき、SSTに参加する実験群と参加しない統制群を設定する。さらに、実験群の中に社会的スキル初期値の低群と普通群を設定する。これらのことを通して、実験群と統制群の違いだけでなく、実験群の参加者の社会的スキルの初期値によるSSTの効果の違いも検証できると考えられる。また、SSTの持続効果を検証するために、SST終了後の3カ月に追跡調査を行う。

先行研究および本研究の手続きを踏まえ、本研究では次の仮説をたてる。

**仮説1** SSTに参加する実験群と参加しない統制群との比較では、実験群の社会的スキルレベルは向上し、統制群のレベルは変化しないであろう。

**仮説2** 実験群において、スキルの向上の余地が大きい社会的スキル初期値の低群は、普通群と比べて、SSTを通して、より多くのスキル向上がみられるであろう。

**仮説3** さらに、実験群の社会的スキルレベルの向上は持続性を有し、3カ月経っても効果は持続されるだろう。

また、本研究では、従来のSSTのプログラムに加え、中国文化の要素をプログラムに組み込み、通文化的要素と文化に特有な要素を兼ね備えている社会的スキル・プログラムを作成する。その上で、文化的要素は参加者の社会的スキルのどの部分の向上に効果をもたらすかを、中国文化的、日本文化的、そして通文化的社会的スキル尺度を用いて測定する。文化的社会的スキル尺度の採用により、本研究では下記の仮説を立てる。

**仮説4** 通文化的社会的スキルと中国文化を反映する社会的スキルのレベルは本研究のSSTプログラムによって向上し、日本文化を反映する社会的スキルのレベルは変化しないであろう。

以上のことより、本研究では2つの研究を設定する。研究1では、文化的要素を考慮した社会的スキル・プログラムを作成し、研究2では、SSTの実践を通して、実験計画法を踏まえ上記の4つの仮説を検証する。

## 研究 1

### 研究目的

研究1は、従来のSSTプログラム（大坊他、2000；後藤・大坊、2005, 2009；津村、2002）を参考にしながら、中国文化の要素を導入して、オリジナルなSSTプログラムを作成することを目的とする。

### プログラム作成の方針

前述した大坊（2006）が提示した社会的スキルの階層構造に関する理論では、社会的スキルを

「基礎スキル」, 「特定スキル」, 「目的的技能」に階層化した。このモデルでは, 「基礎スキル」を土台に「特定スキル」が成立し, 「基礎スキル」と「特定スキル」を総合し, 応用的なスキルとして「目的的技能」があると強調した。本研究は, 大坊 (2006) の社会的スキルの階層構造の考え方を継承しつつ, etic-emicアプローチによる社会的スキルの分類に従って, 新たな社会的スキルの階層構造を想定する。具体的に, 社会的スキルの階層を, 「通文化的社会的スキル=基礎スキル」と「文化特有の社会的スキル=文化的スキル」の2つの層で構成させる。「基礎スキル」は「文化的スキル」の土台であり, 「文化的スキル」は「基礎スキル」の総合的応用となる。また, 「基礎スキル」は視線, 表情, 主張, 理解といった対人コミュニケーションの基礎的なスキルに, 「文化的スキル」は特定の文化に関係するスキルによって構成される。SSTのプログラムは2つの層の内容に対応しながら作成する。

### プログラムの詳細

本研究では, SSTプログラムは社会的スキルの導入編, 基礎編, 文化特性編と展望編, あわせて12のプログラムで構成された。また, 体験学習 (津村・星野, 1996) のプログラムの要領に従い, それぞれのプログラムは「体験」, 「振り返り (自由記述)」, 「小講義 (体験内容と関連のある講義)」という枠組みで編成した (Table 1)。

導入編は第1回と第2回によって構成された。参加者の社会的スキルの能力を把握し, 同時に, 参加者に人間関係のことを考え直す機会を与え, その後のSSTへの関心を喚起した。

第3回から第9回までは, 基礎編を構成した。この部分のプログラムは津村 (2002, 2003, 2004), 大坊他 (2000), 後藤・大坊 (2005, 2009), 中尾 (2006) などの日本での実践を参考にした。参加者が人とのコミュニケーションをとるために必要な言語的/非言語的スキル, 集団の中で人と関わるスキル, そして自他共存のための考え方な

ど社会生活における基本的な社会的スキルをトレーニングのターゲットとして設定した。

文化特性編は第10回と第11回であった。この部分では, 文化的な要素を取り入れられつつ, 基礎編と同様, ラボラトリー・メソッドによる体験学習のプログラム編成の方針に則って, プログラムが作成された。具体的には, 毛・大坊 (2006) などでもとめた中国文化に影響される社会的スキルの「相手の面子」因子, 「友達への奉仕」因子, そして「功利主義」因子の特徴に照らし合わせて, 3つの因子の内容から, それぞれ「面子 (mianzi) への理解と相手の面子の維持の仕方」, 「周りの人を助ける (renqing) 重要性への理解」, 「人間関係におけるネットワーク (guanxi) の働きへの理解および構築方法」を課題とした。

「面子 (mianzi) への理解と相手の面子の維持の仕方」について, まず, 中国における「面子」という言葉の意味をメンバー一人一人に記述してもらい, それをグループ内で共有することを通して, メンバーに理解させることをねらった。その上で, 相手の面子の維持の仕方に関わる2つのロールプレイをメンバー間で互いに実行してもらい, 相手の面子の維持方法を身につけることをねらった。2つのロールプレイはそれぞれ, グループ内のメンバーの一人一人に対して, 相手の長所を見つけ相手をほめてあげるという「あなたのすてきなところ」と, 相手が思っている短所を長所に変えて相手に伝えるという「短所が長所に変身」というプログラムであった。一方, 「周りの人を助ける (renqing) 重要性への理解」と「人間関係におけるネットワーク (guanxi) の働きへの理解および構築方法」については, 中国という文化背景における「人を助ける」ことと「多くの人とネットワーク」を持つ行為の重要性や現れ方を参加者に記述してもらい, グループ内でその知見を共有させた。また, このような共有を踏まえて, 自分がどのように実社会で行動すべきかを考えて, 他のメンバーに伝え, 方法の良し悪しの

Table 1 中国文化の要因を配慮した社会的スキル・トレーニングのプログラム

順序	レベル	テーマ (モジュール)	解説ポイント (小講義内容)	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
1	導入編	・初期評定 社会的スキル尺度： ChUSSI, KiSS-18, ACT, JICS	・話し手としてのスキル、聞き手としてのスキル	初期レベルの把握	自己記式質問紙を回答 グループを2つの作業班に分け、お互いに知り合うように班のすべてのメンバーと1対1で自己紹介をする。終了後、班ごとに自己紹介のプロセスでのコミュニケーションの問題点を話し合わせる。
		・自己紹介(自己紹介／第一印象)		自己表現(話す、聞かせる)、関係調整、他者理解、対人認知	
2		・振り返り	・人間の関係ネットワークの中で人と関わる／人に関わられる	自己意識、対人認知	自分と周囲にいる人々との間がどのような関係で結びつけられているかを図形化する。その上で、色塗りを通して、関係に対する感情を表現する。
		・自分の対人関係を認識(対人関係地図)		自己意識、対人認知	自分と周囲にいる人々との間がどのような関係で結びつけられているかを図形化する。その上で、色塗りを通して、関係に対する感情を表現する。
3		・講義 社会的スキルとは	・社会的スキルが含むもの・特性 ・トレーニング可能性	概念の理解 参加意欲／モチベーションの高揚	社会的スキルの概念、人間関係の中のフィードバックの重要性、そしてジョハリの窓について講義の形で理論から参加者に理解させる。
		人間関係とフィードバック ジョハリの窓		自己開示・フィードバックの重要性	
4		・振り返り	・理想的なコミュニケーション形態 ・コミュニケーション・プロセスとその阻害要因	言語／非言語のそれぞれの役割 コミュニケーションの仕方の再認識 チャンネルの役割 記号化／解読	ある図形を参加者の1人から他の全員に伝えさせる。1回目ではこの1人が他の成員とコミュニケーションができないように伝えてもらう。2回目に対話的な伝え方をさせる。2つの条件で起きたコミュニケーションの違いを話し合いを通して明らかにする。
		・言語／非言語によるコミュニケーション(一方通行/双方通行のコミュニケーション)		非言語の表出・解読 他者理解	
5	基礎編	・視線の役割(不思議な会話)	・表情の再確認 ・コミュニケーションにおけるチャンネル間の連動性	非言語の表出・解読 他者理解	「不思議な会話」では、2人で1組にし、条件を設けて、相手と会話させる(e.g. 楽しいことを相手を見ないで話す)。 「ミラーゲーム」では、2人1組にし、7つの感情(悲しみ、怒りなど)を相手に表出し、相手はそれを模倣する、当てるなどをさせる。
		・表情の表出・解読(ミラーゲーム)		コミュニケーションの仕方 主張、抑制、リーダーシップ、計画、競争	
6		・振り返り	・チームワークを作る	コミュニケーションの仕方 主張、抑制、リーダーシップ、計画、競争	4人1作業班に分け、それぞれ断片的な情報に基づき、口頭で情報を出し合って、作業班で規定時間内に1つの地図を完成させる。また、グループ間で競い合わせる。
		・問題解決「ブックマートXに行こう！」		組織に対する認識 主張・抑制、リーダーシップ、計画、競争	
7		・振り返り	・組織の中の人間行動	組織に対する認識 主張・抑制、リーダーシップ、計画、競争	トランプを使って、企業という場面を設定し、自社の営業利益を向上に向け、社長、部長、課長、社員の間での情報伝達について、シミュレーションを行わせる。
		・組織の中での振る舞い(トランプ企業体)		組織に対する認識 主張・抑制、リーダーシップ、計画、競争	

Table 1 (続き)

順序	レベル	テーマ (モジュール)	解説ポイント (小講義内容)	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
8	基礎編	・自分の価値観を再発見する (価値観のランキング) ・振り返り	・価値観と人間関係	価値観の理解, 自分の価値観/他者の価値観, 相互理解, 主張/抑制, 説得	「愛情」, 「名誉」, 「お金」など10の言葉について, 自分にとって価値があると思う順に順位を付ける。そしてそれをグループで発表し, お互いに質問をし合ったり, 感想を述べ合ったりする。
		・適切なアサーションをする (さわやかに断る, 不満を主張する) ・振り返り	・相手を尊重し, 自分の権利を主張する	主張, 非主張, 攻撃的	シナリオで書かれた相手から不当のリクエストを受けた場面において, どのように相手を断るかあるいは相手に不満を述べるかについて参加者の間で話し合う。その上で, 適切な交渉の仕方をロールプレイを通して身につけてもらう。
10	文化特性編	・相手の面子を考える (短所が長所に変身, あなたの素敵などころは) ・振り返り	・中国人の面子	他者重視の理解, 他者尊重の表出, 自己抑制, 相手への配慮, 関係の調整と向上	全員で中国人の面子は何であるかを考え, 記述した。「あなたの素敵などころは」では, 作業班の他の成員のすてきなところを考え, 相手に伝えさせる。「短所が長所に変身」では, 本人が思っている自分の短所を作業班の成員がそれを長所に変えていき, 本人に伝えさせる。
11		・中国人の「renqing」と「guanxi」を考える  (「renqing」と「guanxi」, さらに, その面子) ・振り返り	・中国人は助け合うことを通して円滑な人間関係を形成する ・中国人の人間関係での面子, 「renqing」, 「guanxi」の絡み合い ・中国人らしい人間関係の特徴	共感, 他者志向, 献身的考え	中国という環境の中で「renqing」と「guanxi」のそれぞれの意味合い, 表し方, 重要性, そして, それに相応しい行動について考え, 記述する。さらに, 社会活動における「renqing」と「guanxi」と面子の連動性について自分の見解を発表してもらい, 自他の意見を総合してもらう。
12	展望編	・最終評定 社会的スキル尺度: ChUSSI, KiSS-18, ACT, JICS ・将来の対人関係に向けて個人の総合的な振り返りと展望	総括: ・プログラムを通して, 考えたこと ・これからの人づきあいを考えよう	最終レベルの把握 実社会に向けるスキルの心の準備 実社会で学んだスキルを運用するための心の準備	自記式質問紙を回答する トレーニングプログラムの全体に対する振り返り, そして今後の社会生活における社会的スキルの応用の展望について, 記述してもらう。

フィードバックをもらった。さらに、「人を助ける (renqing)」と「ネットワーク (guanxi)」と「面子 (mianzi)」の三者が互いに関連しあっていることから、三者の総合的な運用の方法や経験談などについてメンバー間の共有も行った。

上記のプログラムの内容は、いずれも中国文化の社会的スキル内容が課題とされたものであるた

め、プログラムと社会的スキルの因子内容はそれぞれ対応させることが可能であった。これによって、プログラムに基づくSSTを実行すれば、因子内容を構成する中国文化の特徴を反映した行動の向上が十分に期待できるのではないかと考えられる。

第12回は展望編であった。ここでは、トレー

ニング後の参加者の社会的スキルの保有量を測定した。また、トレーニングプログラム全体に対する振り返り、そして今後の社会生活における社会的スキルの応用の展望について記述してもらった。SSTが自分自身の社会的スキルの向上のきっかけとなることに気づいてもらい、日常生活の中で人と付き合う際のモニターリングの意識をアップさせ、最終的に、自分で自分の人間関係の心得と教訓をまとめる力を付けて、社会的スキルの向上を目指した。

なお、統制群に対しては、トレーニングのプログラムを用意しなかった。したがって、統制群に対するトレーニングは行われなかった。ファシリテーターの統制群との接触は、社会的スキルの調査実施時に限定されていた。

## 研究 2

### 研究目的と実験概要

研究2の目的は、研究1で開発したSSTプログラムを実行し、プログラムの効果を検討することである。そのため、研究2では実験計画法に則り、まず実験群と統制群に参加する学生を募集した。両群を対象に、2006年9月SSTの初回の日、一連の社会的スキル尺度を用いて参加者のスキルのレベルを測定した（SST前の測定）。その後、実験群を対象に、研究1で開発したSSTのプログラムを用いてSSTを実施した。SSTの最終回のタイミングに合わせて、SST前の測定で用いた尺度を実験群と統制群で再び測定した（SST後の測定）。さらに、SST後の測定から3カ月後に、同じ尺度を用いて実験群と統制群に対する追跡調査を行った。

### 方法

**参加者の募集** 2006年9月、中国の大連にある遼寧師範大学の心理学に関する授業を受講する大学生58名を統制群とした（実験の概要で言及したSST前の測定、SST後の測定、そして追跡調査を含む3回の測定にすべて対応できたのは51名

で、男：11名、女：40名、平均年齢：21.13±0.82であった）。

実験群は、統制群と同じ大学の大学生40名（男：14名、女：26名；平均年齢：20.79±1.12）であった。初期値によるSSTの効果の違いも検証できるように、参加者の募集は以下のように工夫された。40名のうち、20名（男：4名、女：16名；平均年齢：20.21±1.17）は、2006年4月に同大学で行われた社会的スキルの調査結果（この結果は募集に用いただけで、「SST前の測定」の結果とは異なる調査であった）から、後出する「中国人大学生社会的スキル尺度」の総得点を基準に、得点の最も低い者から順に電話で実験への参加依頼を行い、承諾した者を本研究の「低得点実験群」とした。電話は、前回の調査名簿からランダムに選んだ結果であると告げた。残りの20名（男：10名、女：10名；平均年齢：21.38±0.71）は上記の統制群の募集先と異なる心理学に関する授業から募集し、本研究の「普通得点実験群」とした（追跡調査の時点で1名が退学することにより、19名が分析の対象となった）。

**SSTの実施** 前述した普通得点実験群と低得点実験群を対象に、男女の割合と人数を考慮し、ランダムに2つの実施グループ（1グループは20名）に分けた。研究1で開発した12回のプログラム（1つのプログラムあたりの所要時間は2時間）を、前後のプログラムの間に2～3日の間隔を置きながら、2006年9月の上旬から下旬まで3週間にわたり実施した。実施は社会心理学を専攻し、多くのSSTのファシリテーターを経験した中国人男性によるものであった。参加者の同意の上で、トレーニングの全過程をデジタルビデオカメラを用いて撮影した。すべての参加者は所定したすべてのプログラムに参加し、一律の謝礼が支払われた。

**社会的スキルの測定** 本研究で用いた社会的スキル尺度は以下の通りであった。

1. 中国人大学生社会的スキル尺度（Chinese



University-students Social Skills Inventory: ChUSSI; Mao & Daibo, 2006)。この尺度は中国人の行動様式を理論的根拠として開発されたものである。41項目で構成され、9件法で回答を求めた。「相手の面子」、「社交性」、「友達への奉仕」、「功利主義」の4つの因子を含んでいる。

2. KiSS-18 (Kikuchi's Social Skills Scale; 菊池, 1988)。この尺度は18項目で構成され、5件法で回答を求めた。青年一般の社会的スキルを測定する尺度であり、通文化的適応性も備えている (Takai & Ota, 1994)。また、この尺度を中国人大学生に適用した際の信頼性 ( $\alpha=.82$ ) と妥当性が確認されている (毛・大坊, 2007)。

3. 感情的コミュニケーション尺度 (Affective of Communication Test; ACT; Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980; 大坊, 1991)。この尺度は13項目で構成され、9件法で回答を求めた。非言語的な感情の表出性を測定するものである。中国人大学生に適用した際の信頼性 ( $\alpha=.77$ ) と妥当性が確認されている (毛・大坊, 2007)。

4. 日本的対人コンピテンンス尺度 (Japanese Interpersonal Communication Competence: JICS; Takai & Ota, 1994)。この尺度は日本人論の中で描かれた日本文化および日本人の行動様式に基づいて開発され、日本式の対人関係の特徴を反映している。22項目によって構成され、5件法で回答を求めた。この尺度は「察し能力」、「自己抑制」、「上下関係の調整」、「対人感受性」、「あいまいに対する耐性」という5つの因子によって構成されている。

そのほか、調査紙においては、参加者の性別、年齢などのデモグラフィック変数も含まれていた。

## 結 果

SSTを受けた、あるいは受けなかった中国人大学生の社会的スキルレベルの変化、そしてSSTを受けた学生の社会的スキルの初期値によるSSTの効果の違いを明らかにするために、すべての学生

の社会的スキル尺度の得点を従属変数に、実験条件 (参加者間要因: 統制群・低得点実験群・普通得点実験群) と測定時期 (参加者内要因: SST前の測定・SST後の測定・追跡調査の測定) を独立変数とする2要因混合計画の分散分析を実施した。

Table 2に示したように、実験条件の主効果はChUSSIの「社交性」、「友達への奉仕」、「功利主義」因子だけであった。いずれの社会的スキルの因子の得点においても、「低得点実験群」よりも「普通得点実験群」のほうが有意に高かった。また、「功利主義」因子の得点において、上記の傾向を加え、「統制群」より「普通得点実験群」のほうが有意に高かった。

一方、すべての尺度において測定時期の主効果がみられた。尺度によって、結果が様様ではないが、全体的な傾向として、「SST前」より「SST後」、そして「SST前」より「追跡調査」での社会的スキルの得点のほうが有意に高かったことが示された (JICSの「あいまいに対する耐性」因子は得点が高いほど、耐性がないことを表す。この尺度に限り、「SST前」より「SST後」の得点が低かった)。

さらに、実験条件と測定時期の交互作用があったのはChUSSIのすべての因子 (「相手の面子」、「社交性」、「友達への奉仕」、「功利主義」)、KiSS-18, ACT, そして、JICSの「察し能力」因子、「上下関係の調整」因子、「あいまいに対する耐性」因子であった。そこで、単純主効果の検定を行った (SSTによる社会的スキル得点の向上の有無を検証する本研究の目的から、実験条件と測定時期の交互作用のあった尺度を考察の対象とする上で、単純主効果の検定はそれぞれの実験条件における測定時期の違いだけに注目した)。

単純主効果の検定の結果は以下の通りであった。まず、統制群はすべての尺度において、SST前の測定・SST後の測定・追跡調査の測定の間有意差がみられなかった。これに対して、低得点実験群と普通得点実験群はChUSSIのすべての因

**Table 2** 社会的スキルの得点における実験条件 (3) × 測定時期 (3) の2要因混合計画分散分析結果

	SST前 平均値 (SD)	SST後 平均値 (SD)	追跡調査 平均値 (SD)	実験条件 主効果	測定時期 主効果	交互作用 単純主効果 <sup>a)</sup>
相手の面子				<i>n.s.</i>	$F(2,165) = 21.42,$ $p < .001$	$F(4,165) = 12.42,$ $p < .001, \eta_p^2 = .23$
統制群	130.40 (16.45)	128.75 (17.25)	126.74 (17.93)			
低得点実験群	123.20 (12.98)	135.35 (15.05)	135.80 (13.80)		前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普後, 普前<普追
普通得点実験群	129.79 (21.49)	141.53 (19.21)	141.84 (18.66)			
社交性				$F(2,87) = 3.50,$ $p < .05$	$F(2,174) = 45.01,$ $p < .001$	$F(4,174) = 19.29,$ $p < .001, \eta_p^2 = .31$
統制群	68.75 (14.49)	68.00 (12.78)	67.75 (13.71)			
低得点実験群	56.95 (11.10)	70.30 (9.95)	68.10 (7.26)	低<普	前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普後, 普前<普追
普通得点実験群	66.68 (11.36)	78.21 (11.39)	78.63 (9.48)			
ChUSSI				$F(2,87) = 3.10,$ $p < .05$	$F(2,170) = 8.52,$ $p < .001$	$F(4,170) = 7.21,$ $p < .001, \eta_p^2 = .15$
友達への奉仕						
統制群	38.76 (6.87)	37.86 (6.06)	37.51 (6.70)			
低得点実験群	34.70 (7.04)	37.20 (7.33)	37.75 (6.95)	低<普	前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普後
普通得点実験群	39.16 (4.65)	42.53 (4.48)	41.68 (4.88)			
功利主義				$F(2,87) = 5.09,$ $p < .01$	$F(2,173) = 23.61,$ $p < .001$	$F(4,173) = 9.90,$ $p < .001, \eta_p^2 = .18$
統制群	20.56 (6.01)	20.53 (6.56)	20.27 (5.79)			
低得点実験群	17.20 (4.15)	22.80 (3.16)	22.30 (3.25)	低<普, 統<普	前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普後, 普前<普追
普通得点実験群	22.84 (6.14)	25.95 (5.71)	25.79 (7.38)			
KiSS-18				<i>n.s.</i>	$F(2,170) = 44.15,$ $p < .001$	$F(4,170) = 23.15,$ $p < .001, \eta_p^2 = .35$
統制群	66.67 (10.09)	65.84 (9.09)	65.16 (10.64)			
低得点実験群	60.15 (7.34)	70.10 (7.99)	69.55 (6.72)		前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普後, 普前<普追
普通得点実験群	64.28 (9.45)	70.68 (8.62)	73.11 (8.31)			
ACT				<i>n.s.</i>	$F(2,173) = 14.81,$ $p < .001$	$F(4,173) = 5.96,$ $p < .001, \eta_p^2 = .12$
統制群	66.49 (13.18)	66.22 (12.21)	66.10 (13.28)			
低得点実験群	63.40 (13.38)	72.45 (9.96)	72.85 (11.38)		前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追 普前<普追
普通得点実験群	67.21 (14.05)	72.68 (14.38)	73.89 (13.48)			

Table 2 (続き)

	SST前 平均値 (SD)	SST後 平均値 (SD)	追跡調査 平均値 (SD)	実験条件 主効果	測定時期 主効果	交互作用 単純主効果 <sup>a)</sup>
察し能力				<i>n.s.</i>	$F(2,172) = 4.08,$ $p < .05$	$F(4,172) = 3.95,$ $p < .01, \eta_p^2 = .08$
統制群	22.61 (3.28)	21.69 (3.28)	22.14 (3.76)			
低得点実験群	21.45 (3.63)	23.05 (2.61)	23.40 (2.76)		前<追	なし
普通得点実験群	22.16 (3.95)	23.21 (4.53)	23.95 (3.36)			
自己抑制				<i>n.s.</i>	$F(2,172) = 7.08,$ $p < .01$	<i>n.s.</i>
統制群	24.22 (4.50)	24.75 (4.80)	24.10 (5.10)			
低得点実験群	23.63 (3.67)	25.55 (4.56)	24.85 (4.67)		前<後	
普通得点実験群	23.79 (6.17)	25.58 (5.27)	24.79 (5.57)			
JICS 上下関係の調整				<i>n.s.</i>	$F(2,174) = 9.34,$ $p < .001$	$F(4,174) = 5.04,$ $p < .001, \eta_p^2 = .10$
統制群	12.24 (2.37)	12.16 (1.86)	11.96 (2.34)			
低得点実験群	11.45 (2.11)	12.90 (1.65)	12.90 (1.80)		前<後, 前<追	低前<低後, 低前<低追
普通得点実験群	12.05 (2.74)	13.11 (1.73)	13.21 (1.69)			
対人感受性				<i>n.s.</i>	$F(2,174) = 4.47,$ $p < .05$	<i>n.s.</i>
統制群	9.78 (2.46)	9.82 (2.30)	10.29 (2.39)			
低得点実験群	9.55 (1.99)	10.60 (2.37)	10.40 (2.14)		前<後, 前<追	
普通得点実験群	10.16 (2.81)	10.79 (2.37)	10.74 (3.40)			
あいまいに対する耐性				<i>n.s.</i>	$F(2,174) = 2.82,$ $p < .10$	$F(4,174) = 2.78,$ $p < .05, \eta_p^2 = .06$
統制群	10.02 (2.52)	10.41 (2.09)	10.18 (2.26)			
低得点実験群	10.45 (2.31)	9.20 (2.02)	9.20 (2.21)		前>後	なし
普通得点実験群	10.53 (2.59)	9.68 (3.28)	10.11 (2.62)			

<sup>a)</sup> SSTによる社会的スキル得点の向上の有無を検証する本研究の目的から、単純主効果の検定はそれぞれの実験条件における測定時期の違いだけ注目した

子, KiSS-18そしてACTにおいて, SST前とSST後の得点に有意な差 ( $p < .10 \sim .01$ ; ACTの普通得点実験群では非有意) がみられた。同時に, SST

前と追跡調査の得点にも有意な差 ( $p < .10 \sim .01$ ; 「友達への奉仕」因子の普通得点実験群では非有意) がみられた。また, 低得点実験群はJICSの「上

下関係の調整」因子においても、SST前とSST後の得点、そしてSST前と追跡調査の得点に有意な差（いずれも $p < .05$ ）がみられた。これらの得点の変化傾向としては、SST後の得点がSST前より高く、追跡調査の得点がSST前より高くなっていた。SST後の得点と追跡調査の得点の間には有意な差はみられなかった。なお、JICSの「察し能力」因子と「あいまいに対する耐性」因子においては、交互作用があったが、有意な単純主効果がみられなかった。また、この2つの因子の偏イータ二乗の値はそれぞれ.08と.06であり、他の交互作用のある因子と比べてかなり低かった。

### 全体的考察

本研究の目的は、文化的要素が配慮されたSSTのプログラムの開発と、プログラムに基づいたSSTの実践効果の検証であった。研究1では、従来のSSTプログラムに中国文化の要素を導入して、社会的スキルの階層構造の考えに従い、対人コミュニケーションの基礎的なスキルと中国文化に関係する社会的スキルを兼ねたSSTのプログラムを作成した。研究2では、研究1で開発したSSTプログラムを中国人大学生に実施し、実験計画法に則り、文化に根付く社会的スキル尺度を用いてSSTプログラムの効果を検討した。

#### 社会的スキル尺度の得点変化によるSST効果の検討

SST前とSST後の比較では、SSTを受けなかった統制群の中国人大学生はすべての社会的スキル尺度において有意な得点変化がなかったのに対して、SSTを受けた実験群は、7つの尺度（ChUSSIの4つ因子、KiSS-18、ACT、JICSの「上下関係の調整」因子）において、得点に有意な変化があった。得点の変化方向としては、SST後の得点がSST前の得点より高いということであった。これらのことにより、本研究の仮説1「SSTに参加する実験群と参加しない統制群との比較では、実験群の社会的スキルレベルは向上し、統制群のレ

ベルは変化しないであろう」は支持された。すなわち、本研究のSSTプログラムは大学生の社会的スキルの向上に効果があると言える。対人関係の改善を目的とするSSTが、実際に社会的スキルの向上をもたらした本研究の結果は、先行研究（大坊他, 2000；後藤・大坊, 2005, 2009；津村, 2002）と一致し、改めてSSTの効果を裏付けた。

実験群の得点向上について、上記の変化のあった7つの尺度のうち、ACTとJICSの「上下関係の調整」因子における得点の向上は低得点実験群にのみみられたが、ChUSSIの4つ因子とKiSS-18において、低得点実験群か普通得点実験群にかかわらず、社会的スキルの得点がともに向上した。低得点実験群と普通得点実験群の得点変化のあった尺度や因子には大きな差異がなく、SSTプログラムが2つの実験群にほぼ同じような効果をもっていたことから、本研究の仮説2「実験群において、スキルの向上の余地が大きい社会的スキル初期値の低群は、普通群と比べて、SSTを通して、より多くのスキル向上がみられるであろう」は支持されなかった。すなわち、社会的スキルの向上の可能性は、対人関係に苦手な人だけにあるのではなく、普通の人にもある。先行研究であまり着目していなかったこの点の検討結果から、SSTは広範囲の対象者——対人関係に苦手か否かに関係なく——に適用できることを示唆している。今後、この種のSSTは学校教育や生涯教育などの場面での活用が期待される。

さらに、統制群はすべての尺度においてSST前、SST後、追跡調査の3回の測定において、有意な単純主効果がみられなかった。これに対して、低得点実験群と普通得点実験群はChUSSIのすべての因子、KiSS-18、ACTにおいて、低得点実験群はJICSの「上下関係の調整」において、SST後の得点（ACTの普通得点実験群を除く）だけではなく、追跡調査の得点（「友達への奉仕」因子の普通得点実験群を除く）もSST前の得点より高くなっていた。これらのことにより、本研究

のSSTの効果はトレーニングの直後に限らず、トレーニング終了後3カ月後でも、その効果を持続することができた。本研究の仮説3「実験群の社会的スキルレベルの向上は持続性を有し、3カ月経っても効果は持続されるであろう」は支持された。これまでのコミュニケーション分析および体験学習の考え方に基づくSSTは、理論上の長期的な持続効果(津村・星野, 1996)を強調した一方、実際のデータによる理論の裏付けは少なかった。本研究で得られた結果はそのような理論を証明すると同時に、プログラムの実用化の可能性を増すことにつながる。

#### 社会的スキル尺度の得点変化の有無による文化的要素が配慮されたSST効果の検討

本研究で用いたKiSS-18とACTという2つの尺度については、尺度の内容がある特定の文化に偏らず、中国人大学生を測定した際にも高い信頼性が得られている(毛・大坊, 2007)ことから、2つの尺度は通文化的社会的スキル尺度として中国での使用が適切だと考えられる。実験群の得点がこれらの尺度で上昇したことにより、本研究で考案されたSSTプログラムが通文化的な社会的スキル、すなわち、社会的スキルの階層構造における「基礎スキル」の向上に効果があると考えられる。

また、前述したように、ChUSSIは中国文化および中国人の行動様式をベースに開発された中国式的社会的スキルの尺度である。実験群はこの尺度において、得点が増した。これにより、本研究のSSTプログラムに導入した中国文化に関する内容が中国式的社会的スキルの向上に効果があると考えられる。この結果を本研究が想定した社会的スキルの階層構造(etic-emicのアプローチに基づく)と対応して考えた場合、SSTプログラムは階層構造における「文化的スキル」のレベルの向上をもたらしたと言えよう。

一方、本研究では、日本文化に基づいて開発したJICSを用いた場合、「自己抑制」と「対人感受性」において、有意な交互作用がみられなかった。

「察し能力」、「あいまいに対する耐性」および「上下関係の調整」においては有意な交互作用がみられたものの、「察し能力」と「あいまいに対する耐性」のSST前・後の比較では、低得点実験群、普通得点実験群に関係なく、単純主効果がみられなかった。また、この2つの因子の効果量を表す偏イータ二乗の値は中国文化の社会的スキルの因子や通文化的社会的スキル因子を大きく下回っていた。これらのことにより、本研究のSSTプログラムで導入した中国文化に関する内容は、日本式的社会的スキルの向上に効果がないという可能性が大いに考えられる。

本研究のSSTプログラムは、①通文化的な社会的スキルを向上させることができた、②また、中国式的社会的スキルも向上させることができた、③しかし、日本式的社会的スキルを向上させることができなかったという3つの結果から、本研究の仮説4「通文化的社会的スキルと中国文化を反映する社会的スキルのレベルは本研究のSSTプログラムによって向上し、日本文化を反映する社会的スキルのレベルは変化しないであろう」は支持された。本研究で開発したSSTプログラムの文化に特有な要素が検証できたと推論される。

しかし、本研究の仮説4をより完全なものにするためには、日本文化に基づくJICSの「上下関係の調整」因子の低得点実験群における得点の有意な上昇を説明する必要がある。「上下関係の調整」因子を構成する項目では、目上の人への尊重を中心とするものであるが、これらの内容は日本文化に存在すると同時に、中国文化にも存在すると考えられる。そこで、本研究で用いたChUSSIの因子の内容と照らし合わせると、「上下関係の調整」因子の内容がChUSSIの「相手の面子」因子と似ていることがわかる。また、低得点実験群のSST後の両因子の相関関係が示すピアソンの相関係数は $r=.61$  ( $p<.01$ )であり、「上下関係の調整」因子の得点の変化が合理的なものだと考えられる。

## 本研究の意義

本研究では、実験デザインの完備とプログラムの文化的要素への配慮の2点によって、SST研究における検証方法の精緻化と検証精度の向上に貢献することができた。

従来のSST研究は、実験群のみでプログラムの効果検証を行っていた。しかし、そのような実験デザインでは、得られた効果は純粋にプログラムによる効果かどうかは不明瞭であった。本研究では、統制群を設けることにより、プログラムの効果がSSTによるものだと一層明確にすることができた。加えて、実験群を「低得点実験群」と「普通得点実験群」に細分化することにより、社会的スキルのレベルがもともと低い参加者とそうでない参加者に対するSSTの効果の違いも検証することができた。

また、従来のSSTに関する研究は社会的スキルそのものに焦点を当てることが多く、社会的スキルの内容を強く規定する「文化」への注目が少なかった。本研究では、etic-emicアプローチに規定される社会的スキルの文化的要素をSSTプログラムに導入することによって、文化に特有なSSTの問題を扱った。SSTプログラムの効果が検証できたことによって、社会的スキルの文化的要素はSSTによって向上できることが実証された。また、社会的スキルの向上を測定するツールについて、従来のSST研究で用いた欧米文化背景下で開発された尺度を改めて、「通文化的な尺度」、「SSTのターゲットとなる文化に由来する尺度」、さらに「SSTのターゲット以外の文化に由来する尺度」という3種類の尺度を用いることにより、文化の視点からSSTによる社会的スキルの変化を検証することが可能となった。

## 本研究の限界と展望

第1に、本研究で用いた統制群を改善する必要がある。従来のSST研究では、トレーニングのプログラムの効果は実験群のみにて確かめられていた(津村, 2002; 後藤・大坊, 2005, 2009)。

本研究では、実験群とは別に、統制群を設けることを通して、プログラムの実験群に対する効果をより明確に確認することができた。しかしその一方、本研究で用いた統制群はAdams, Openshaw, Mills, & Noble (1988) で用いたwait-listと似ており、統制群にトレーニングのプログラムを設定せず、統制群のファシリテーターとの接触は社会的スキルを調査する場面に限られていた。このような実施方法により、実験群の得点の変化と統制群の得点の安定は参加者がファシリテーターとの接触の度合による可能性がある。したがって、今後、実験計画においては、ファシリテーターが統制群との接触の程度を実験群と同等にし、統制群にSST以外のトレーニングのプログラム(e.g., アナグラム課題など)を設けることにより、実験群の得点変化の根拠を確かめる必要がある。

第2に、本研究で用いたトレーニング効果を確認する方法について、検討する余地があろう。本研究では、自己報告式の社会的スキル尺度を用いて、参加者の自らの報告により、トレーニングの効果を確認した。しかし、そもそも、SSTの最終目的は、社会的スキルを身につけて行動できることである。SSTの対人関係における効果の検討はその人の行動そのものに注目する必要があると考えられる。本研究で用いた自己報告式尺度による効果の検討は、尺度に記入する本人の主観的な判断に左右されやすく、得られた変化の結果が参加者の意識レベルに留まって、行動に反映されていない可能性が否めない。したがって、自己報告式の調査のみでトレーニングの効果を確認するのは不十分であると考えられる。今後は、トレーニングの参加者と直接相互作用を行う相手からの評価、そして、観察者としての第三者からの評価を導入し、参加者の行動の観点からもトレーニングの効果を確認する必要があると考えられる。また、本研究では、SSTプログラムの「文化特性編」の作成はChUSSIの尺度内容をベースにしていたため、SSTにあった内容と質問紙に出た質問内容

がかなり類似している。それによって、研究の目的や尺度評定の意図が参加者に容易に推測されてしまい、参加者の要求特性が働くという可能性も十分に考えられる。さらに、同じ尺度を SST 前、SST 後、3 カ月後と 3 回実施したので、参加者が研究意図に気がついていた可能性も排除できない。よって、本研究で得られた結果の一般化には慎重であるべきであろう。

第 3 に、本研究で用いたサンプルへの検討が必要であろう。本研究は、「文化的 SST プログラム」の検証を目指していた。それを実現するために、中国人大学生の SST の結果を用いた。しかし、「中国人」のサンプルを用いて、「中国文化の要素」の効果を検証するには、限界があると言わざるを得ない。なぜなら、「中国人に中国文化の要素を身につけさせることができた」ということはあまりにも自明の結果だからである（しかし、検証の必要はある）。そのために、本研究のプログラム、とりわけ中国文化の要素に基づく部分を、中国文化以外の出身者を対象に実施する必要があると考えられる。中国文化出身者とそうでない出身者への効果を総合的に検討することで、本研究で得られている「文化的要素が配慮された SST プログラムはある文化に特有の社会的スキルにしか効果をもたらさない」という結論がより確固たるものになると考えられる。そこで、本研究で検討した尺度に日本文化の社会的スキル尺度が含まれていたため、今後は、本研究で開発したプログラムを日本文化出身者（例えば、日本人大学生）に実施することを通して、より完備した「文化的 SST プログラム」の検証を行いたい。

#### 引用文献

Adams, G. R., Openshaw, D. K., Mills, T., & Noble, S. (1988). Loneliness in late adolescence: A social skills training study. *Journal of Adolescent Research*, 3, 81-96.

相川 充 (1992). 大学生における孤独感と自尊心、シャイネス、社会的スキルとの関係 宮崎大学教育

学部紀要 (教育科学), 72, 5-26.

相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係——自己表現を援助する—— 誠信書房 pp. 3-21.

相川 充 (2009). 新版 人づきあいの技術 サイエンス社

相川 充・藤田正美・田中健吾 (2007). ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連——脆弱性モデルの再検討—— 社会心理学研究, 23, 95-103.

Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. London: Penguin Books.

Berry, J. (1969). On cross-cultural comparability. *International Journal of Psychology*, 4, 119-128.

Berry, J. (1989). Imposed etics-emics-derived etics: The operationalization of a compelling idea. *International Journal of Psychology*, 24, 721-735.

Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 991-1008.

Cao, Z. P., Huang, Y. S., Cheng, K., & Jiang, L. (2009). Applicability of SSI applied in Chinese college students. *Chinese Journal of Clinical Psychology*, 17, 34-37 (in Chinese).

大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定——ACT 尺度の構成—— 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.

大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説——適応的な対人関係の構築—— 対人社会心理学研究, 3, 1-8.

大坊郁夫 (2006). 社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き 電子情報通信学会技術研究報告, 106(219), 31-36.

大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 (2000). 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究, 23, 22.

Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.

後藤 学・大坊郁夫 (2005). 短期間における社会的スキル・トレーニングの実践的研究 対人社会心理学研究, 5, 93-99.

後藤 学・大坊郁夫 (2009). 短期的な社会的スキル・トレーニングの実践——社会人への適応を目指して—— 応用心理学研究, 34, 193-200.

- 堀毛一也 (1994). 社会的スキルを測る——人あたりの良さ尺度—— 菊池章夫・堀毛一也 (編著) 社会的スキルの心理学 川島書店 pp. 168-176.
- Hwang, K. K. (1987). Face and favor: The Chinese power game. *American Journal of Sociology*, **92**, 945-974.
- Hwang, K. K. (1997). Guanxi and mientze: Conflict resolution in Chinese society. *Intercultural Communication Studies*, **7**, 17-37.
- Hwang, K. K. (2006). Constructive realism and confucian relationism: An epistemological strategy for the development of indigenous psychology. In U. Kim, K. S. Yang, & Hwang, K. K. (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context*. New York: Springer. pp. 73-108.
- 今野裕之・堀 洋道 (1993). 大学生の対人円滑性についての研究——対人関係についての自己評価・他者評価との関連から—— 教育相談研究, **5**, 1-10.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- Kolb, D., Rubin, I. M., & McIntyre J. M. (1971). *Organizational psychology: A book of readings*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Liu, Y. L. (1988). Power up the researches of the only child's characters. *Psychological Exploration*, **3**, 48-52 (in Chinese).
- 毛 新華・大坊郁夫 (2005a). 中国の若者の社会的スキルに関する研究 (1) ——自由記述調査と予備的尺度構成の試み—— 日本心理学会第69回大会発表論文集, 162.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2005b). 中国の若者の社会的スキルに関する研究 (2) ——中国版社会的スキル尺度の構成—— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 382-383.
- Mao, X. H., & Daibo, I. (2006). The development of Chinese university-students social skill inventory. *Chinese Mental Health Journal*, **20**, 679-683 (in Chinese).
- 毛 新華・大坊郁夫 (2006). 中国における大学生社会的スキル尺度 (ChUSSI) の有効性に関する研究 日本心理学会第70回大会発表論文集, 281.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2007). KiSS-18の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, **7**, 55-59.
- 中尾陽子 (2006). ラボラトリー方式の体験学習が自己および他者理解に及ぼす影響 日本心理学会第70回大会発表論文集, 282.
- Peng, R. Y., & Dong, G. H. (2010). The value obstruction of social skills and internet addiction of college students. *Journal of Educational Science of Hunan Normal University*, **9**, 124-126 (in Chinese).
- 皿田洋子 (2003). 臨床の場での SST 教育と医学, **51**(10), 70-76.
- 園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236.
- 田中健吾 (2003). 職場ストレスと社会的スキル 教育と医学, **51**(10), 62-69.
- 津村俊充 (2002). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果——社会的スキル尺度 KiSS-18 を手がかりにして—— アカデミア (人文・社会科学編), **74**, 291-320.
- 津村俊充 (2003). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 456-457.
- 津村俊充 (2004). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の効果に関する研究——社会的スキル尺度 KiSS-18 と学習スタイル得点の変化より—— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 594-595.
- 津村俊充・星野欣生 (1996). Creative human relations (I~VIII) プレスタイム
- Yu, L. (1994). Introduce of social skills scale. *Psychological Development and Education*, **2**, 28-32 (in Chinese).
- 周 潔 (2006). 変わりつつある中国の家族関係 人民中国 2006年2月 <<http://www.peopleschina.com/maindoc/html/fangtan/200602.htm>> (2011年2月1日)
- Zhuang, M. K., Gan, Y. Q., & Liu, H. H. (2004). The revision and preliminary application of social skill scale. *Chinese Mental Health Journal*, **18**, 755-759 (in Chinese).



## Development and Evaluation of a Social Skills Training Program Suitable for Chinese Cultural Characteristics

Xinhua MAO and Ikuo DAIBO

Graduate School of Human Sciences, Osaka University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2012, Vol. 21 No. 1, 23-39

The social skills of Chinese youth are reported to be declining. Therefore, a social skills training (SST) program involving the unique cultural characteristics of Chinese people was developed, and its effectiveness was investigated. In Study 1, a SST program was developed incorporating cross-cultural social skills and the unique identity of Chinese culture. In Study 2, 98 Chinese undergraduates were divided into a control and an SST group, who participated in the new SST program. All participants were administered a series of culture-based social skills scales. The results indicated a significant effect of the SST program in the SST group compared with the control group. Moreover, the SST group showed significant changes on Chinese-culture and cross-culture scales, but no changes on the Japanese-culture scale. These effects remained at the 3-month follow-up assessment. Thus the components of cultural traits in the newly developed SST program were verified.

**Key words:** program development, social skills training, cross-culture, Chinese culture